

# ご英霊の思いに 応えるために

世界が贈る日本への言葉

第九版 特別版  
令和三年みたま祭

靖国神社

戦後の自虐史観から、日本人が知らなければいけない歴史を、封印され今日まで来ませんでした。ご英霊はさぞ悔しい思いをされているのではないかと思うのです。

そんな思いからこの冊子を皆様にお届けしております。私はジャーナリストではありませんし、歴史家でもありません。田舎の神職です。真実を調査する資金ありませんし、ネットワークもありません。只々市井の図書等から、マスコミが取り上げない歴史を皆様に紹介したいと思います。

先日BSの番組で日本が満州を統治していた時代の頃満州国の「満州難民感染都市知られざる悲劇」という番組がありました。

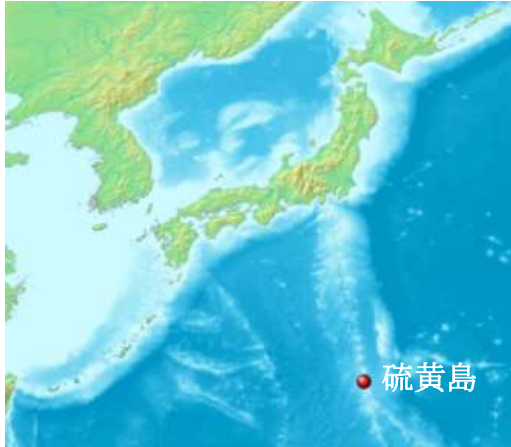
内容は、敗戦後の旧満州で発疹チフスなど感染症の拡大が起きていた。瀋陽で日本人居留民を救う為、治療を続けた満州医科大学の医師・看護師の知られざる闘いに新史料と証言で迫るといふもの。

昭和二十年、敗戦後の旧満州に残され日本人居留民は百五十万余り。ソ連軍の侵攻のなか奉天（現・瀋陽）など大都市にいた多くの日本人が次々に発疹チフスにたおれた。この時、患者の治療に当たったのは満州医科大学の医師、学生、看護師。ワクチンの製造を試みたが、医師もまた感染症で命を落としていく。ようやく終息するも、ペスト、次いでコレラが発生する。引き揚げに至るまで続いた知られざる感染症との闘いを貴重な証言や新資料で描いたものでした。見ごたえのある作品でした。

しかしこういういった番組で、いつも気になることはあります。当時を知る引揚者がマイクを向けられて証言してるんですが、その方は開拓団として満州に渡り、苦労の最中か敗戦、苦労ばかりで良いことはなかった、日本は大陸に進出して悪いことですよ。他民族がいるところに進出して、日本が悪いことをした。そういう言葉を特に取り上げて編集放送してるような気がしてなりません。

それまでのアジアの国はタイを除いてほとんどが、欧米の植民地となっています。日本が満州に進出したこれも一つのその時の世界の歴史の中では致し方ないかっただと思うのです。只々日本が進出して悪いことをした、と必ず当時辛くも帰国できた人々の多くの証言の中で日本は悪いことをしたという証言を必ず入れて編集されているのが気になるのです。





色々近現代史を学んでみますと、私たちが学び耳に聞く情報にある種の法則を感じます。欧米列強である西洋人がアジアを植民地したことは悪く言わず、日本が大陸に出たことは悪いことだ、侵略戦争だと言う傾向にあります。戦後の自虐史観はまさにこれでしょう。特にマスメディアはそのように編集放映する傾向にあります。

そんなことから本日はあまり積極的に取り上げられないある事を皆様に紹介してみたいと思います。

先日あの Google Earth で硫黄島 見ておりました。ところがあの硫黄島少し隆起し海岸線が後退しておりました。即ち大きくなっていたのです。浜辺が広がっておりました。硫黄等は東京都ですが、東京都は面積広がっていますね。

さて、この硫黄島は大東亜戦争で熾烈な戦いがあつた島ですが、この硫黄島が一躍有名になったのは例の「硫黄島からの手紙」です。クリント・イーストウッドの監督による映画が公開され、そこで栗林中将が有名になりました。それまで栗林中将は生まれ故郷の長野の松代では、若者を死に追いやった極悪非道の人として教えられていたんです。地方によつてはここまで自虐的な教育がされているのに驚きますが、しかしあの映画で、名誉が回復され、戦後初めて故郷で栗林中将の慰霊祭が行われました。

この栗林中将については以前のこの冊子で紹介しておりますので今日は別のある日本人の軍人の話をしてみたいと思います。

日本人なら、この軍人を誇りに思うはずです。そしてそこで散華された方々を永遠に子孫に語り続け誇りに思うはずです。

さて大東亜戦争の振り返ってみましょう。当初日本は連戦連勝を続けておりました。しかしあのミッドウエーの戦い昭和十七年六月から日本は次第に負け戦になっていくのであります。この太平洋戦争については、いろんな歴史学者の先生方が言っておられますが、国力については確かに米国がはるかに日本を上回っておりますが、しかし、軍艦、航空機等の数量で決して劣っていたわけではないのです。しかも米国は日本と戦うにはあの太平洋を越えてやってくるわけで、戦力は距離の二乗に比例して落ちていきますから、最初から負け戦とは言えません。

ただ、何と言つても石油をアメリカに抑えられているのが、決定的なポイントでしょう。したがって戦いが長引くと追い詰められていくことになります。昭和二十年になりますと、戦史に残る激しい戦いとして沖繩戦、そして、硫黄島の戦いが挙げられます。

アメリカ軍は硫黄島上陸準備として七二日間連続で爆撃を行い、昭和二十年二月十九日上陸作戦を敢行しました。激しい戦いの末、日本は玉砕をしていますが、その悲しい記憶の中に日本人の気概が残され今に伝わっております。

それは、浅田真二陸軍中将です。

一ヶ月以上にもなる激戦の後、米軍は硫黄島を占領しました。

その翌日、摺鉢山の穴から、負傷した日本の陸軍少佐が降伏の印の白いハンカチを持って出てきました。

「司令官はいないか。穴の中には、有能な三十名の青年達が残っている。彼らを日本のため世界のために生かしてやりたい。私を殺して彼らを助けてほしい」と言いました。

少佐を引見した第五艦隊のレイモンド・スプルーアンス司令官は、

「お前も部下達も助けてやろう」

と話しかけましたが、彼は

「サンキュー」

といったまま息絶えてしまいました。

米軍は、すぐさま青年達が残る穴に、タバコや缶詰を投げ入れて、残された青年達に穴から出てくるように勧告しました。

しかし日本の青年たちは応じずに抵抗を続けました。膠着状態は五月まで続きました。

やがて何名かが餓死し、最後に残された者たちは手榴弾で自決して果てました。爆発音がしたとき、スプルーアンス司令官は穴のところに飛んで行きました。すると穴の入り口に英語と日本語で書かれた手紙が置かれていました。

『閣下の私達に対する御親切な御厚意、誠に感謝感激に堪えません。』

閣下より戴きました煙草も肉の缶詰も、皆で有り難く頂戴いたしました。

お勧めによる降伏の儀は、日本武士道の習いとして応ずることができません。

最早水もなく食もなければ、十三日午前四時を期して全員自決して天国に参ります。



硫黄島 摺鉢山

終りに貴軍の武運長久を祈って筆をおきます。

昭和二十年五月十三日

日本陸軍中尉 浅田真二

米軍司令官スプルーアンス大將殿 』

スプルーアンス司令官は、戦後アメリカに帰ってから十数年間、米国全土を講演して次のように語りました。

アメリカの青年達よ。

東洋には素晴らしい国がある。

それは日本だ。

日本には君達が想像もつかない立派な青年がいる。

ああいう青年がいたら、

やがて日本は世界の盟主になるに違いない。

アメリカの青年達よ、奮起せよ！



レイモンド・スプルー  
アンス司令官

この話はマスコミが報じることがなく、学校でも教えず、ほとんどの日本人が知らない話ですが、日本人の誇りある話として、一人でも多くの日本人の目に触れてもらいたいと思います。硫黄島の戦いは、昭和二十年二月十九日～三月二十六日に繰り広げられた日米の激戦です。

前述した降伏の印の白いハンカチを手にした負傷した日本の陸軍少佐の名前は、いまとなってはわかりません。けれどこのとき少佐は、片足を失っていたそうです。足から大量の出血しながら、最期の力を振り絞って痛みをこらえて投降し、ついに息絶えたのだと思います。

この話は、手紙の現物が現存していないことから、作り話だとする日本の学者の意見もあるのだそうです。しかしスプルーアンス大將が全米を講演して回ったことは事実で、大將ほどの人物が嘘を言うとも思えず、私は真実であったことだろうと思っています。

文中にある浅田真二陸軍中尉は、実在の人です。昭和六年に東大経済学部を卒業し、社会人として働いているところを、赤紙招集で硫黄島に赴任しています。

もし仮に、自分がこの浅田陸軍中尉の立場にあったなら、どのように行動したでしょうか。この戦いの時点で、日本はすでに制海権を失っています。日本本土からの補給以外に、弾薬の補給も食べ物も水もないという状況です。持久戦になれば、最後は島を護りきれなくなることは、最初からわかっている戦いです。

それでも硫黄島を敵に奪われたら、敵は悠々と日本本土を爆撃しにやってくる。その爆撃は都市部に行われますから、確実に言えることは、故郷の父母妻子や愛する人の命が奪われるということですから。だから戦う。どこまでも、いつまでも戦う。それが国を愛し故郷を愛し人を愛する日本男児の道だったのです。

しかし矢玉尽き、上官の少佐も足を失い、最期の力を振り絞って敵陣のもとに投降するから残る者を助けてくれと懇願に行つたのです。米軍も少佐の意向を受け入れ、司令官みずから壕内に食べ物などを支給してくれ、投降を、繰り返し勧められています。

投降すべきかどうか。

部下たちは、みな若い。

まだまだこれかの人生です。

しかし当時、青年兵士たちは捕虜になればひどい乱暴を受けると教えられています。

腹も減っています。

もう弾も食べ物も飲水さえありません。

壕内にいるのは、傷ついた者たちばかりです。

この者たちみんなに、

「俺（浅田陸軍中尉）は死ぬと命ずるのか。生きろと命ずるべきなのか」

人の上に立つ上官として、浅田真二陸軍中尉には大きな心の葛藤があったものと思います。

みなさんならどうするでしょうか。

結果、浅田真二陸軍中尉以下、残ったメンバーは、全員、死を選びました。そういう選択をすることができたのが、いまはもう歳をとった私達の祖父たちの若き頃の日々です。

内田樹さんというフランス文学の方が書かれた本があり、その中で今我々は例外的平和な社会に住んでいる。すなわち現在の日本です。よく私どもは「生きがいを求めて」とか「自分探しの旅」「自分に適した仕事を求めて」そんなこと言えるのもこれは今の例外的な平和な日本社会だから言えるのであって、これは奇跡の中にいるということを知らないといけませんとおっしゃっています。

「真の日本の姿」 小名木善行 講演録等を参考

万倉護国神社社務所